



日本語の獲得期にみられる2拍のリズミカルな音声表現 : 一幼児の生後11~17か月の観察より

岡林, 典子
坂井, 康子

(Citation)

表現文化研究, 10(2):127-141

(Issue Date)

2011-03-14

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81002915>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002915>



日本語の獲得期にみられる2拍のリズミカルな音声表現 — 一幼児の生後11～17か月の観察より

The 2 Beat Vocal Expression during the Period of Japanese Acquisition: Observation of an Infant from the Age of 11-17 Months

岡林典子 Noriko Okabayashi

坂井康子 Yasuko Sakai

概要

現在、我々は日本語文化の中で育つ乳幼児の音楽的成長の基盤となる韻律の獲得について検討することを目的として、継続的に研究を進めている。これまでに3拍とポーズからなる音声表現に注目して、言語獲得期にある一幼児の縦断的な観察データを基に、リズムと抑揚の側面からその特徴を明らかにしてきた。本稿では同時期に出現した2拍の音声のまとまりに着目し、韻律的特徴を音響的に調査した。その結果、日本語獲得と関わる以下のような2拍の音声表現の発達的变化が認められた。

① 喃語的表現の発生期(生後11～12か月)

生後11か月時の2拍の音声は、単発的な喃語様の表現であった。生後12か月時の2拍の音声には恣意的な繰り返し表現が現れた。

② 喃語的表現の展開期(生後13か月)

生後13か月時の2拍の音声は、未だ喃語的表現であり、恣意的で偶発性が強く、独り言のように自分に向けられているものが多い。しかし、テンポとリズムは発生期より安定し、一定の間隔で複数回繰り返されるなどの変化がみられた。

③ 喃語的表現から有意味語(1語)表現への移行期(生後14か月)

生後14か月になると、単発ではあるが有意味語(1語)を2拍にまとめる表現がみられ始めた。この時期は喃語的表現から有意味語(1語)を用いた2拍表現への移行期であるといえる。

④ 有意味語(1語)表現の展開期(生後15～17か月)

生後15か月からは、獲得した話し言葉を2拍にまとめた表現が次々と現れるようになる。この時期は2拍のリズム枠を基盤として表現がさまざまに広げられた有意味語(1語)表現の展開期とみることができる。

この他の特徴として、リズムの規則性、音声と動作の同期性、発声の多様性などが認められた。

キーワード: 言語獲得期、日本語、リズム、2拍の音声表現、音響分析

Abstract

We have been studying continuously to acquire an understanding of Japanese prosody, that is the base of musical growth of an infant growing up in Japanese culture. We have already clarified the features of the 3 beat vocal expression by looking at the data of an infant from 11 to 14 months. In this paper, we will investigate the features of the 2 beat vocal expression. Now, we will look at the next development of the 2 beat vocal expressions.

① The First Stage: Babble like expressions of the 2 beat vocal expression (from 11 to 12 months)

The 2 beat vocal expressions of a baby of 11 months are singly expressions like babble. Usually, expressions of a baby at 12 months are random and repeated.

② The Second Stage: The babble development period (from 13 months)

At this stage, a 13 months old baby is still babbling, representing the 2 beat vocal expression. Her expressions are random, coincidental, and she talks to herself. But her tempo and rhythm is steadier than the first stage.

③ The third stage: Transition period of babble (from 14 months)

At this stage, the baby starts to recognize and use the 2 beat vocal expressions that are meaningful.

④ The Final Stage: Development of meaningful expressions (from 15 to 17 months)

At this stage, the baby begins to expend her development to a wide range of meaningful 2 beat vocal expressions.

Moreover, some features are recognized, regularity of rhythm, synchronization of voice and movement, and diversity of utter.

Keywords: *Period of Language Acquisition, Japanese, Rhythm, 2 Beat Vocal Expression, Acoustic Analysis*

1. 問題と目的

1.1. 言語獲得期の子どもの音声

言語獲得期にある子どもたちの約9割が2歳から3歳の時期に整った文を言えるようになるといわれている¹。この時期の子どもには、言葉を拍節的にまとめて繰り返すリズムカルで多様な表現がみられる。たとえば、2歳児の「キイロイ、キイロイ、キイロイ、モーブ(黄色い毛布の意)」(岡林 2010²)や、3歳児の「ローク、ローク、ロクロクローク、ロクロクロク●、ロクロクロク●、ロクロクロクロク、ロクロクロク●」(●はポーズ)³(数字の「6」をもとにして唱えられたもの)などがそれである。言葉を獲得し、ある程度自由に使えるようになった子どもたちのこのような表現は、日本語のリズムのまとまりを感じて、楽しみながら表現しているように思われる。

一方、言葉をまだ獲得していない乳児は、どのように日本語の韻律的特徴を獲得し、その音声を日本語らしくまとめるようになっていくのだろうか。韻律の獲得の問題は研究の対象が乳幼児であり、統計的な分析に耐えるだけの十分なデータが集まりにくいなどの理由から、これまで研究があまり進んでこなかった。ただ近年は英語の韻律面の発達に関する研究や日本語の韻律的特徴を捉えた研究などもなされてきている(窪菌 1997⁴; 香川・伊藤 2004⁵)。喃語期にある生後10～12か月の乳児は、すでに母語において頻出する語の音形パターンに対する知識をもっていると考えられており(林 1999⁶)、また生後10か月くらいから、乳児の生成する音声には音韻、韻律双方のレベルで母語の音響特徴が現れてくるともいわれている(麦谷 2004⁷)。

日本語を音楽的側面から捉えるとその特徴として、ピッチ(高低)によるアクセント、平らなイントネーション、シラブルの等拍性、強弱要素の希薄さなどが挙げられるが⁸、この中でシラブルの等拍性は発話のリズムとの関わりをもつものである。日本語の音(おん)⁹は短い1音ずつが同等の単位として存在し、そのような音が組み合わされて発話がなされるが、1音では落ち着きが悪い、発音しにくい、聞き取りにくいなどの要因とも関連して、日本語はつねに2音という単位を基軸として成り立っている。2音は落ち着きを得る発話の最小単位であり、発話の基本単位であるとされる。また、その基本単位が繰り返されることによって、4音という単位が成立する。そうして落ち着きを得た4音は、日本語の堅固な枠組みであるともいわれている(坂野 1996¹⁰)。

これまでに我々は、この4音に関わると思われる3拍とポーズからなる唱えことば様の音声表現を、言語獲得

期にある一幼児の12～14か月までの縦断的な観察データに基づいて、リズムと抑揚の側面からその特徴を明らかにしてきた(岡林・坂井 2007¹¹、坂井・岡林・佐野 2008¹²)。観察対象児には同時期に2拍のまとまりを感じさせるリズムカルな音声表現が出現していた。これらの表現は、先に挙げた2～3歳頃の拍節的でリズムカルに繰り返される音声表現へとつながっていくものなのだろうか。

本稿では観察対象H児に初語が出現した生後11か月から2語発話が現れ始めた17か月までの期間にみられた2拍の音声表現を取り上げ、それらが言語の獲得に沿ってどのように変化するかを実証的に捉え、日本語の獲得期にみられる子どものリズムカルな音声表現の特徴と、その発達過程を明らかにすることを目的とする。なお、本稿では2拍の音声表現のリズム面に焦点を当てて分析を行う。抑揚については稿を改めて論じるつもりである。

1.2. 本稿で扱う2拍のリズム

1.2.1. 「拍」について

音楽用語においても、また日本語においても「拍」という語が用いられるが、それぞれ示す事柄は異なっている。音楽の拍は、等間隔の時間単位を示す。日本語では「モーラ」を「拍」とも呼んでいるが、モーラの別称として用いられている「拍」を本稿では先述した「音(おん)」と呼ぶ。音声的な区切りの単位としては一般に「モーラ(拍)」と「音節」が用いられるが、日本語の、ある音声をモーラとして捉えるか、音節として捉えるかは方言や年齢によって異なる。特に言語獲得期の乳幼児の音声を一定の単位で区切ることは非常に困難である。本稿では、乳幼児期に現れた唱えことば様の音声を音響的な分析と聴覚判断とによってひと塊ずつの音声として区切り、この時間単位を「1拍」と呼ぶ。本稿で扱う1拍は次項で説明する「律拍」と捉えられるものであって、モーラのことではない。

1.2.2. 「拍(律拍)」について

律とはリズムを意味しており、特定の音数構成によって成立する特別なリズムを「音数律」という。また、音数律における1拍ずつの拍子の単位を「律拍」という¹³。日本語の音数律の基本型は、1律拍に2音ずつ割り当てられるので、2音のまとまりに律拍を感じる場合が多い。例えば、「交通安全」は、リズムカルに発話されると、「こう・つう・あん・ぜん」と2音ずつのまとまりによって4拍(律

拍)に感じられる。

2. 研究方法

2.1. 観察対象と観察期間

観察対象:H児(2004年6月14日生まれ)

観察期間:H児の観察は、生後11か月(2005年6月13日)より生後35か月(2007年6月8日)まで断続的に行った。本稿で扱う事例のデータは、生後11～17か月(2005年6月14日～12月5日)の観察記録に基づいている。

2.2. 観察・分析の方法

2.2.1. 観察と事例分析の方法

観察は2週間に1度、岡林がH児の自宅を訪問し、日常生活における自然な母子の関わりを約1時間にわたりビデオに収録した。観察に際して、H児が観察者に関わりを求めてきたときには、ことばをかけたり触れ合うなどして関わった。また、母親とも自然に会話を交わした。観察終了後、ビデオをみながら行動の内容と状況を行動記録として記録した。事例の抽出に関しては、岡林と坂井がともにビデオ資料と観察記録ノートをみながら討議し、H児の発声した音声表現の中で、2拍に感じ取れるものを場面とともに取り出し、分析の対象とした。

2.2.2. 音響的分析の方法

2拍のまとまりとして感じ取れるH児の音声を、音声分析ソフト¹⁴を用いて音響的に分析した。さらに必要に応じて音声のピッチを抽出し、図中に発音を記述した(例えば【図1】)。図の上段は音声波形、下段は基本周波数を抽出した結果である。【図1】は「ヒューチャ」と2拍で発声した音声を分析しており、これにより、それぞれの拍の長さ(横軸は音声の長さ、単位はmsec.)や拍内でピッチがどのように動いているか(縦軸は音の高さ、単位はHz)、またどのくらいの間隔で発声しているか(波形のない部分はポーズ)などを見取ることができる。

発音の記述は2名以上の聞き取りに依っているが、本稿で扱う1歳過ぎのH児の発音は明確な日本語の母音、子音の発音に至っていない。そのため、図中のカナ表記は、聴取した音声に比較的近い日本語の音を記述したものである。本稿ではH児の発音をカタカナで、母親の発音をひらがなで表記している。

2.3. H児の日常生活と発達状況

H児は愛知県出身の父親と鳥取県出身の母親の第1

子である。両親ともに大学入学時より関西に在住し、現在に至っている。H児は1日の殆どの時間を母親とともに過ごしているが、近所に月齢の近い子どもが数人いるので、それぞれの家を行き来し、関わりをもっている。

運動面の発達では、生後3か月半で寝返りができるようになり、6か月でずり這いを始めた。7か月には支えなしで座れるようになり、ハイハイで移動するようになった。10か月で支えなしで立つことができ、12か月には初歩が観察された。その後の歩行は順調に発達している。

言語面の発達では、11か月時に顔を隠して「バァ」と言うなど初語が出現し、1語発話がみられ始めた。12か月には指差しが始まり、「アッ」、「ハイ」、「ウン」などの有意味語を獲得し、13か月には、「アッチャ(お茶)」などの名詞もみられた。さらに、14～16か月にかけては、「ニャーニャー」や「ワンワン」、「アット(ありがとう)」「タンタン(お父さん)」「カカー(お母さん)」「ナイナイ(しまう)」「ネンネ」など語彙の獲得量が増え、17か月には「バイキン、ダ(ばいきんまん、だ)」など助詞を含む2語発話が出現した。

3. 事例の分析と考察

リズミカルな2拍のまとまりが感じられる音声表現は、H児の観察を開始した11か月時には数場面でみられた。このような表現が11か月以前から現れていたかどうかは不明である。本稿では2拍の音声表現が、初語が観察された生後11か月から2語発話が現れ始めた17か月までの期間に、H児の言語獲得の進行状況に沿ってどのように変化するのかを捉えるために、観察記録より2拍の音声表現が出現した場면을抽出し、分析を行った。

3.1. 喃語的音声を2拍にまとめる

生後11か月後半のH児は、初語出現の後、有意味語を2、3語獲得し始め、順調な成長をみせている。日常のH児の音声表現は喃語的音声によるものが大部分を占めている。事例1はH児が自発的に喃語的音声を2拍のリズムにまとめて表現したものである。

事例1 喃語的音声を2拍にまとめる①(生後11か月29日)《2005年6月11日》

昼食後の落ち着いた時間に、母親はH児と向き合っており、絵本『いいおかお』(福音館書店)を読み聞かせようとしている。母親が「ふーちゃんが、ひとりでいいおかおをしていました。そこへ、いいおかおをみせてって犬

が来ました」までを読むと、H児は絵本から目をそらし、母親に背中を向けて、「ヒューチャッ、アイ〜」【表1、譜例1】と発声して、背後にある空気清浄機へと興味を移し、這って近づいていった。

観察の初日にあたるこの日、H児には「ヴェ、ヴェ…」や「チャッ」「ヤッ」などのアクセントのついた短い音声や、「ファ〜」「パヤ〜」のような伸びやかで、やわらかい喃語的音声が多くみられた。そうした中で、事例1は音声模倣のさかんなH児が、「ふうちゃんが…」と読み聞かせる母親の声を取り込んで、「ヒューチャッ」と表したのではないと思われる表現である。音声は、「ヒュ」と「チャ」の2音節から成っているが、【表1、譜例1】と【図1】より、ひと呼吸の中で第1音節が「ヒュー」と引き伸ばされ、第2音節が「チャッ」と強く短く発声されて、2拍にまとまっていることが理解できる。H児の様子からは、この表現が偶発的なものであり、意図的になされたものではないと感じられた【図1、12】。

次に挙げる事例2は、事例1に続く場面でみられたものである。

事例2 喃語的音声を2拍にまとめる②(生後11か月29日)《2005年6月11日》

事例1で、絵本から背後にある空気清浄機に関心を移したH児は、空気清浄機の後の狭い空間にもぐり込み、窮屈だが心地よさそうに座る。しばらくすると、「チョーアッ…アッケー」【表1、譜例2】と発声しながら立ち上がり、空気清浄機の上に顔を出す。すると、母親はとてもタイミングよく「はい、ばあ。はなちゃん、ばあ…」と声をかける。

このH児の表現はやわらかな優しい声で発せられた。【表1、譜例2】と【図2】より、1回目の2拍の表現は「チョ」と「ア」の2音節から成り、事例1と同様にひと呼吸の中で第1音節が「チョー」と引き伸ばされ、第2音節が「アッ」と強く切れてリズムカルな2拍のまとまりを構成していることが読み取れる。逆に2回目は、第1音節が「アッ」と短く、第2音節が「ケー」と引き伸ばされて2拍にまとまっている。

【表1、譜例2】からは、2回目の第2拍「ケー」という発声立ち上がる動作と同期しており、H児が声のまとまりを感じながら動きをまとめようとしていることが理解できる。H児の動作に対する母親の「ばあ」というタイミング

のよいことばかけは、子どもの行為を見守り、気持ちを共有しようとしている母親の働きかけであると思われる。

次の事例3は、事例1、2から約1か月を経た時期のものである。

事例3 喃語的音声を2拍にまとめて繰り返す(生後12か月25日)《2005年7月8日》

H児はソファの上に仰向けに寝て、お気に入りの猫のぬいぐるみを観察者が落とすタイミングを待っている。ぬいぐるみがお腹の上に落ちると、大きな笑い声をあげる。笑いが収まると、もう一度して欲しいと催促するように「テーテッ … テーテッ … テーテッ」【表1、譜例3】と、ぬいぐるみを差し出しながら3回の発声を繰り返す。

事例1、2と同様に、この場面の表現はひと呼吸の中で第1音節が「テー」と伸ばされ、第2音節が「テッ」と強く切れて2拍のまとまりを構成していることが、【表1、譜例3】と【図3】より確認できる。ただ、本事例が先の2つの事例と異なる点は、2拍のまとまりが連続して3回繰り返されているところである。これまでのH児に関する研究¹⁵では、生後12か月時に初めて3拍(ポーズを含むと4拍になる)の音声表現が現れ、13か月時にそれらが繰り返され始めたことを確認した。また別の観察対象児では生後12か月時にみられた2拍や4拍の喃語的音声が、14か月時に繰り返され始めたことを確認した¹⁶。このように「繰り返し」の出現は月齢の増加に沿ってみられる発達的な変化であるといえる。

ここでの表現は、場面の状況からみて観察者(=執筆者)には「もう一回してほしい」というH児の意思表示のように受け取れたが、この時期のH児の言語獲得状況からは、意思表示がなされていたかどうかの確認を取ることは難しい。

次の事例4は、事例3と同日にみられた喃語的音声の繰り返しに動作を伴ったものである。

事例4 喃語的音声を2拍にまとめて、動作を同期させる①(生後12か月25日)《2005年7月8日》

大型テレビの前に立ってさまざまなスイッチに触れながら遊んでいるH児は、「バービッ、バービッ」【表1、譜例4】と発声しながら前後に身体を動かす。

ここでの表現は、先の事例1、2、3と同様にひと呼吸

の中で第1音節が「バー」と伸ばされ、第2音節が「ビッ」と短く切れて、2拍のまとまりを構成している。先の3つの事例と異なる点は、この場面では、2拍にまとめられた喃語的音声の繰り返しの、身体を前後に揺らす動作が同期していることである。H児の発声は呟くようなやわらかい自然な声であり、動きも声と同様に軽くてやわらかな前後の動きであった。この場面の表現からは、H児が声と動きを一体にして、つながりをもって表現していることが理解できた。

次の事例5も声と動きが同期した場面である。

事例5 喃語的音声を2拍にまとめて、動作を同期させる②(生後13か月7日)《2005年7月20日》

H児はソファの上にお気に入りの絵本『えんにち奇想天外』(ほるぷ出版)を広げ、何かの絵を探すように立ったまま頁をめくっている。観察者が「はなちゃんの好きな、どれかな?」と言葉をかける。H児は「ネィ」「チャ～」などと喃語的音声を発しながら、さらに頁をめくり続けようとするが、うまくめくれないので、「チャーチャッ」と強く発声し、手に力を入れて勢いよく数頁を一気にめくる。その後は頁をめくる手の力を抜き、めくった頁が逆戻りする様子をみながら、次第に声量を減らしてやわらかい声で「チャーチャッ、チャーチャッ…」【表1、譜例5】と4回繰り返す。最後の音声は、はっきりとした2拍ではなく、2拍目がジャルゴンのように変化した。

この場面での音声表現は、ひと呼吸の中で第1音節が「チャー」と伸ばされ、第2音節が「チャッ」と短く切れて2拍にまとめられている点で、先の事例1～4と共通している。また動作を伴っていることは事例4との共通点であるが、さらにこれまでの事例と比較して発達的に変化したと思われる点は、①2拍の音声表現を繰り返す回数が増加している、②繰り返される2拍のリズムが安定している、などである。これまでの表現では、発声の1回目と2回目の間隔が恣意的で、偶発的な印象を受けるが、本事例では5回の流れが一定のテンポを保持して、スムーズに進行しており、発達的な変化が感じられる。

また【表1、譜例5】からは、初回は力強く頁をめくる動作とアクセントのついた力強い発声との同期がみられることや、頁をめくる行為が終結した後には次第に声量が少なくなっていくことなど、事例4と同様に声量と動きの連関が理解できる【図4、13】。

3.2. 1語(有意味語)を2拍にまとめる

生後14か月になったH児は有意味語の獲得も進み、順調に語彙を増やしている。生後11～13か月の期間に確認できた有意味語の獲得数は、バア、ホラ、アッチャ(お茶)など13語であったが、生後17か月までには約50語に増えた。大部分が喃語的音声であった日常の音声表現は、少しずつ有意味語を含むようになり、母子のコミュニケーションにも言語でのやりとりが増加してきている。

そうした状況の中で、事例6、7は生後11か月時に獲得した「バイバイ」の一語をリズミカルな2拍で表現したものである。

事例6 1語(バイバイ)を2拍にまとめる①(生後14か月20日)《2005年9月2日》

H児は絵本『ねずみくんのチョコッキ』を読んでもらっているが、まだ途中であるにも拘らず、さっさと絵本を閉じてしまう。母親は「終わり～? まだこれからやのに…あ～あ、終わっちゃった」と残念そうである。H児は「もう、おしまい!」というように明るい声で「バーバイ」と発話した。遊びに来ていた母親の友人がH児をまねて、「ばーいばい」というと、母親もすぐに続けて「ばーいばい」と言い、さらに絵本を片づけることを促すような「なーいない」という表現に変化させた。「バーバイ」というH児の表現をきっかけに、周りの大人の間に「ばーいばい」と「なーいない」のかけあいが生じた【表1、譜例6】。

この事例は、これまでの日常生活の中で繰り返されている母親の発話(はずむ形¹⁷のリズムを含む「ばーいばい」)を取り込んできたH児が、自ら試みた表現であると思われる。母親の発話「ばーいばい」は2拍(律拍)からなり、第1拍は第1音節が「ばー」と伸ばされ、短い「い」との組み合わせで「ばーい」とはずむリズムが構成されている。しかし、現時点でのH児には、はずむ形の2音を表現することは難しく、可能な範囲での表現として「バーバイ」と試みたのではないかと推察される。

また、H児の「バーバイ」という表現をきっかけに発展した母親と友人のリズミカルなかけあいは、日ごろH児がこのようなリズミカルな音声表現を耳にする環境で育っていることを示唆している。

次の事例7は、事例6から約10日後に観察されたはずむリズムを含んだH児の表現である。

事例7 1語(バイバイ)を2拍にまとめる②(生後14か月31日)《2005年9月13日》

H児は母親の友人の財布を持って歩き回っている。観察者のカメラに近づいて来たが、くると背を向けると「バイバイ」と発話して、カメラから遠ざかる。母親は財布を持ち主に返すことを促すように、H児に「ないない、しょう。ないない」と何度も呼びかける【表1、譜例7】。

この事例はH児に初めてはずむ形を含む2拍(律拍)の表現がみられた場面である。【表1、譜例7】の J=69 のテンポ表示と【図5】から、H児の「バイバイ」がゆっくりとはずんで発話されていることが読み取れる。この場面の10分後、H児は「オーイデッ」【表1、譜例8】【図6】と同様のはずむ形を含むリズムカルな2拍(律拍)の発話で母親を誘っている。これらの2つの表現が自発的になされたことから推察すると、H児は14か月後半には、はずむ形を含む2拍(律拍)の表現の枠組みを獲得しているものと思われる。

次の事例は意図的な行為の芽生えを感じさせる場面である。

事例8 1語(感嘆詞)を2拍にまとめ、動作を同期させる(生後15か月17日)《2005年9月30日》

H児は積み木で遊んでいる。散らかった積み木を1つ取って頭に乗せ、故意に手を離す。積み木が落ちると「ア～」と抑揚のある声を発し、観察者に視線を向けて笑う。一連の行為は、次第に「アーアー」という発声と積み木を落とす動作とが同期してくる【表1、譜例9】。発声の合間には「ブエンネッ」「ブージジエィ…」などジャルゴンが盛んである。

【図7】より、この場面での2回の音声ジャルゴンが挟んでリズムカルな2拍のまとまりを維持していることが読み取れる。また【表1、譜例9】より、H児の音声と動きが同期していることが見て取れる。このような音声と動きの同期は先の事例2や4でもみられたが、それは誰かに向けて意図的に行われた行為ではなく、偶発的なものであった。本事例でのH児は、積み木を故意に落とした後に「ア～」と残念そうな声を出し、観察者に視線を向けて笑うという行為を繰り返している。一連の行為からは、他者に対して意図的に関わろうとするH児の意図性の萌芽が感じられ、発達的な変化として捉えられる。

また、積み木を落とした後に発声されるH児の「ア～」という音声は、「ア～、落ちてしまっ残念」「ア～、落ちちゃったよ。みて」などという意味を含んだ感嘆詞として理解できる。先の事例6でみられたように、母親は絵本を途中で閉じてしまったH児に対して、「まだこれからやのに…。あ～、終わっちゃった」ととても残念そうに声をあげた。おそらく日常のさまざまな場面で母親には同様の「あ～」という表現が出現していると思われる。そのようにみると、本事例でのH児の音声表現は、母子間で日々繰り返される日常的なやりとりから取り込まれたものではないかと推測できる【図7、14】。

事例9はH児が抑揚の豊かなやわらかい声で母親に呼びかけた場面である。

事例9 1語(チャーチャン[おかあさん])を2拍にまとめる(生後16か月29日)《2005年11月11日》

少し眠くなってきたH児は機嫌が悪くなり、母親から離れた場所でむずかるような声を出していたが、次第に母親に近づいて行き、抑揚のある伸びやかな声で「チャーチャン … チャ～チャッ」【表1、譜例10】と呼びかける。母親はH児の身体を包むように両手で触れ、目をみながら「なに？ はあい。なに？」とゆったりとした優しい声で応える【図15】。H児は母親の対応に接し、機嫌を直して心を落ち着かせていった。

この場面では、チャーチャン(おかあさん)の1語がひと呼吸の中で「チャー」と「チャン」に等分割され、2拍のリズムを有して、リズムカルに2回発話された。H児の音声は自然でやわらかく、豊かな抑揚をもって伸びやかに発せられた。【表1、譜例10】と【図8、9】より、2回目の発話の方がゆったりと大きな抑揚をもって発声されたことが読み取れる。また2回目の発話には、「チャーチャン(おかあさん)」と繰り返し呼びかけるH児が、「おかあさん、…ねえ、おか～あさん」というように、2回目の方により強く甘える気持ちを込めているように感じられた【図8、9】。

事例10は、「チーチョ(よいしょ)」というかけ声がリズムカルに繰り返された場面である。

事例10 1語(チーチョ[よいしょ])を2拍にまとめて繰り返す(生後17か月12日)《2005年11月25日》

外遊びからの帰りに、H児は自宅のある3階までマンションの階段を母親とともに上っている。母親は「は一

なちゃん、がーんばれ」とかけ声をかける。H児は母親の励ましを受けながら、「チーチョ、チーチョ」【表1、譜例11】と自らに繰り返しかけ声をかけて、意欲的に階段を上っていく。

この場面の表現は、生後12か月時の事例4にみられた「バービツ」の表現に似ている。リズムとテンポはほぼ同じであり、ひと呼吸の中で第1音節が「チー」と伸ばされ、第2音節が「チョ」と短く切れて2拍にまとまり、リズムカルに繰り返されている。事例4と異なる点は、事例4は恣意的になされた表現であったが、本事例はかけ声として意識的に繰り返された発話であることである。H児はまだ「よいしょ」とうまく発音できず、「チーチョ」という発音であったが、執筆者は別の観察対象児（14か月児）においても、同様に「ヤーシャ、ヤーショ」とかけ声をかけながら階段を上る場面を確認している¹⁸。こうした子どもの発話は大人と同じ発音で表現されていないが、かけ声として子ども自身が意識的に表現している点に意図性が感じられ、発達的な変化として捉えられる。

事例11は、「どうぞ」というリズムカルな発話に、物を差し出す動作を同期させた事例である。

事例11 1語（ドージョ）を2拍にまとめ、動作を同期させる（生後17か月12日）《2005年11月25日》

昼食後、食器が片づけられたテーブルに、H児、母親、観察者の3人が向き合って座っている。観察者は母親にインタビューをしながらノートに記録を取っていた。H児もペンを持ち、小さなノートに書くまねをしていたが、観察者の目をみて「ドージョ…ド～ジョ」【表1、譜例12】といいながら身をのり出し、メモ用紙を差し出す【図16】。H児の手の動きは、「ドージョ」の発話と同期している。

【表1、譜例12】より、H児の「ドージョ」という発話がノートを差し出す動作と同期していることが見て取れる。発話はひと呼吸の中で第1音節が「ドー」と伸ばされ、第2音節が「ジョ」と短く切れて2拍のまとまりが構成されている【図10】。H児は少し間をおいて2回発話したが、2回目の方が1回目よりも差し出す動作に力が入り、発話のテンポもゆるやかで抑揚も豊かであった【表1、譜例12】。この2回目の表現には、観察者にノートを差し出そうとするH児のより強い気持ちが込められているように感じられた。

「ドージョ」というリズムカルな2拍の音声表現は、この場面以外にも、カバンから物を出して母親に「ハイ、ドージョ」と手渡す場面や、クレヨンを観察者に「ドージョ」と差し出す場面などいくつか確認されており、この時期のH児にしっかりと身につけているものと思われる。

事例12は、母親が発した擬音語をきっかけにして、H児が創造的な2拍の擬音語表現を生み出した場面である。

事例12 母親の発話「ざくっ」を「ザックン」と2拍にまとめ、動作と同期させる（生後17か月22日）《2005年12月5日》

H児は包丁で切る感触を楽しむための木製のおもちゃで遊んでいる。マジックテープでつながれたレモンの切れ目を手で引き離そうとするH児をみて、母親が「包丁は？」と声をかけ、「ざくっ、ざくっ」といいながら木の包丁で切ってみせる【図17】。すると、H児は母親の持つ包丁を手にとってレモンの切れ目に差し込み、「ザックン」とリズムカルに発話しながら切ろうと試みる【図18】。母親は高く発せられたH児の声のトーンをまねて「ざっくう」という【表1、譜例13】。

包丁をうまく使って切ることができなかったH児は、さらに「ザックン」と何度も繰り返しながら手でレモンや大根、人参などの切れ目を引き離そうと試みる【表1、譜例14】。

この場面でH児は、母親の「ざくっ」という擬音語の発話をきっかけにして、自ら「ザックン」という創造的な表現を生み出した。それはリズムカルな2拍にはなっていない母親の発話を基にして、H児が自身で2拍にまとめたオリジナルな表現であった。生後11か月では偶発的に2拍のまとまりをもって「ヒューチャツ」【表1、譜例1】と発していたH児は、約半年の期間の経過とともに語彙の獲得量を増し、言語理解力を向上させることにより、意図性をもって創造的に2拍の音声表現を試みるに至っている。ここにはH児の発達的な変化を捉えることができる。

H児の「ザックン」【表1、譜例13】という表現は、ひと呼吸が2分割されて、第1音節は「ザッ」と促音を含んで短く切れ、第2音節は「クン」と撥音を含んでまとまり、2拍のリズムを感じさせる。また数回発話された「ザックン」【表1、譜例14】【図11】は、第1音節に長音を含み、第2音節に撥音を含んで2拍のまとまりを感じさせる。1拍目の長音にはレモンや野菜の切れ目を2つに引き

離そうとする動作が同期しており、H児の力の入れ具合が表れている。

4. 総合的考察

前章では約6か月間にみられた2拍の音声表現より12事例を抽出し分析を試みた。本章ではそれらの結果をまとめて、総合的な考察を行う。

4.1 話し言葉の獲得と2拍の音声表現の変化過程

【表1】はH児が初語を獲得した生後11か月から2語発話が出現した17か月までの話し言葉の獲得過程と、その期間における2拍の音声表現の変化の過程を一覧にしたものである。この表に基づいて話し言葉と2拍の音声表現の関わりをまとめる。

① 喃語的表現の発生期(生後11～12か月)

初語を含む僅かな有意味語を獲得した生後11か月における2拍の音声は、単発的な喃語的表現であった。その後、生後12か月にかけて有意味語の獲得量が少しずつ増加し、2拍の音声に恣意的な繰り返し表現が現れた。

② 喃語的表現の展開期(生後13か月)

生後13か月までに、「アッ」「ハイ」「バイバイ」などを含む14語の有意味語が獲得されたが、この時期の2拍の音声は、まだ喃語的な表現であり恣意的で偶発性が強く、独り言のように自分に向けられているものが多い。しかし、テンポとリズムが発生期よりも安定し、一定の間隔で複数回繰り返されるなどの変化がみられた。

③ 喃語的表現から有意味語(1語)表現への移行期(生後14か月)

生後14か月になると、有意味語の獲得は20語まで進み、単発ではあるが有意味語(1語)をリズムカルな2拍にまとめる表現がみられ始めた。ジャルゴンも盛んにみられるこの時期の2拍の音声は、喃語的表現から有意味語(1語)を用いた2拍表現への移行期であるといえる。

④ 有意味語(1語)表現の展開期(生後15～17か月)

生後15か月からは、獲得した話し言葉(1語)を2拍にまとめる表現が次々と現れるようになる。それらは、「ア～」という感嘆詞を用いた表現に始まり、その後「チャーチャン(おかあさん)」という呼びかけや、「チーチョ(よいしょ)」というかけ声にまで広がりをみせた。また、「ドージョ(どうぞ)」など母親をはじめとする周りの人間を意識した、対人的で意図性が感じられる有意味語を用いた2拍の表現も現れた。さらに母親の「ざくっ」という発話をきっかけに、「ザクン」という創造的な2拍の

擬音語表現が生み出された。この時期は2拍のリズム枠を基盤として表現がさまざまに広げられた有意味語(1語)表現の展開期とみることができる。

4.2 2拍の音声表現にみられる特徴

初語の出現から1語発話期にみられた2拍のリズムカルな音声表現を分析した結果、以下の3つの特徴を見出すことができた。

① リズムの規則性——第1拍が引き伸ばされ、第2拍が短くなる

観察期間中に発話の流れは喃語から有意味語へと移行し、創造的な表現への発展をみたが、2拍のリズムの枠組みは、H児の多様な2拍表現の基盤として一貫性を保持していた。これは、2拍(律拍)が日本語の表現単位としてのまとまりをもたらしやすく、堅固な枠組みとして特別な安定性をもつ¹⁹ という日本語発話の特質を、H児がすでに喃語期後半から一語発話期において身につけていることを示唆するものである。

またH児の2拍の音声表現には第1拍が引き伸ばされ、第2拍が短くなるという特徴が認められた。事例の中で示された14の譜例のうち、譜例9と譜例13を除く12例においては、「ヒューチャッ」「テーテッ」「バービッ」「チャーチャッ」など第1拍が長音を有している。こうした表現が多くみられたことは、何を示唆しているのだろうか。

長音に1音(モーラ)の長さを感じて「ヒューチャッ(hyu.u.cha.●)」「テーテッ(te.e.te.●)」「バービッ(ba.a.bi.●)」と表現しているH児には、日本語話者がつ「モーラを基本単位とするリズム感覚」が生後11か月の時点で身につけていると考えられる。窪田²⁰ はモーラという日本語に特徴的なリズムの基本単位を外国人の日本語学習者が体得することの難しさを指摘している。たとえば「とうきょう(東京)」「かんさい(関西)」「とくしま(徳島)」「かなざわ(金沢)」と同じ長さをもっていると日本語話者は感じているが、外国人の日本語学習者はモーラを基本単位とするリズム感覚がないので、長母音や撥音などを極端に短く発音し、「東京(too.kyoo)」「関西(kan.sai)」を「徳島(to.ku.si.ma)」や「金沢(ka.na.za.wa)」とは異なる長さを有すると感じるというのである。H児の「ヒューチャッ」や「テーテッ」などの表現には、すでに日本語話者のリズム感覚が現れている。

また生後17か月には母親の「ざくっ」という発話を基に、「ザクン」という創造的な表現がみられた。ここでは、促音を1音分の長さとして感じた表現がなされてい

る。これまでの事例から長音を用いた表現と促音を用いた表現の出現時期を比較すると、長音を1音と感じる感覚の方が促音よりも先に育つといえるかもしれない。あるいは長音や促音に対して1音分の長さを感じる感覚が同時期に育ってはいるが、促音を発音することの方が難しかったのかもしれない。これに関しては、他の研究者の知見や別の観察児のデータの分析を重ねて判断する必要があると考える。

② 声と動作の同期性

H児の音声表現には、14の譜例中7例に動作の同期がみられた。また階段上りのかけ声「チーチョ」はH児の足の動きと完全に同期していたわけではないが、上り出したときの第一歩は声と同期した動きがみられた。これを含むと14例中8例に動作が伴われていたことになり、半分以上の譜例が動作を伴ったものとなる。子どもの表現は音声と動きの同期したものが多く、執筆者はこれまでの研究²¹において確認してきた。また長年にわたって保育園での子どもの日常生活を観察してきた藤田²²は、0歳児が喃語や擬音語風の言葉をリズミカルに唱える429場面を分析した結果、身ぶりや動作とともになされる発話が圧倒的に多いことを指摘している。

H児の動作は初期には発話の一部分に偶発的に同期していたが、月齢が進むに従って発話全体に意図性をもってなされるようになり、発達的な特徴が見出せた。

③ 発声の多様性

H児の2拍の音声表現は、一人で身体を揺らす場面、絵本の頁をめくる場面、甘えて母親に呼びかける場面などさまざまな場面で現れた。乳児期の発声には2つのタイプがあると考えられている。相互交渉（コミュニケーション）を行う媒介としての発声と、一人での喃語に代表される自己刺激的な発声とされる²³。事例1～12を振り返ってみると、生後11～13か月の時期では喃語的表現が主であり、それらは後者の自己刺激的な発声に該当している。事例1で絵本から目をそらして「ヒューチャッ」と発した声は、伸びやかなやわらかい声であった。また事例4で前後に身体を揺らしながら発せられた声は、のどの力が抜けて、呟くような自然な声であった。一方、手に力を入れて絵本の頁をめくるときは、アクセントのついたかたい声であった。このように、喃語的表現での発声は、身体の動きやその場の状況に応じて多様になされていた。

これに対し、14か月以降の発声は母親や観察者を意識的に捉えた相互交渉（コミュニケーション）を行う媒介としての発声であった。事例9で母親に甘えて呼び

かける「チャーチャン（おかあさん）」の声は、抑揚のある伸びやかな声であり、事例10での階段を上るときのかげ声は歯切れがよくリズムにのっていた。また、事例11で観察者にノートを差し出すときの声は、豊かな抑揚をもって語りかけられていた。このようにH児の発声は場面場面の気持ちを反映し、状況とともに変化する多様性を有している。

5. 今後の課題

前章でみてきたように、H児は豊かな抑揚をもって2拍の音声表現を行っていた。ただ本稿では抑揚の特徴について十分に分析することができなかった。稿を改めて詳細な検討が必要である。またH児についてこれまでに分析を行った3拍とポーズからなる音声表現²⁴と本稿で取り上げた2拍の音声表現が日本語の獲得に沿ってどのように関連しているのかを比較検討することも必要である。さらには、他児との比較やH児自身の今後の発達と展開についても課題が残されている。

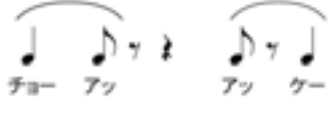
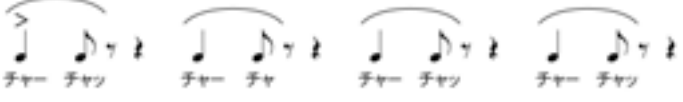
本稿の内容はすべて執筆者2名で協議したものであるが、執筆分担は以下のとおりである。「1.2.1」「2.2.2」の本文執筆、音声分析および作図を坂井が担当し、「1.2.2」を岡林と坂井が担当した。それ以外の本文執筆および採譜を岡林が行った。

本稿をまとめるに当たり、研究にご協力くださいました奥野朋子さん親子に心より感謝申し上げます。

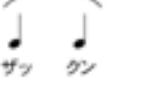
本研究は、日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究(C)「保育士・教員養成における音声・歌唱教育に資する乳幼児音声の分析的研究」(課題番号:22530891、代表者:坂井康子)、および、基盤研究(A)「人物像に応じた音声文法」(課題番号:19202013、研究代表者:定延利之)の助成を受けたものである。

表1 話し言葉の獲得と2拍の音声表現の変化過程

※…は少し間隔が空くことを示す。()の語は、本来の意味を示す。

月 齢	獲得した言葉	2拍にまとめられたリズムカルな音声表現
11 か 月	【一語発話出現】 ・バァ ・バイバイ	譜例1 2拍にまとめられた喃語的音声「ヒューチャツ」 $\text{♩} = 96$ ひと呼吸  H児の音声表現： ヒュー チャツ 譜例2 2拍にまとめられた喃語的音声「チョーアツ … アッケー」 $\text{♩} = 88$ ひと呼吸  H児の音声表現： チョー アツ … アッ ケー H児の動き：  立ち上がる
12 か 月	・アッ ・ウン ・ヨイショ ・バァ ・バツ ・アイ(はい) ・パイパイ(おっぱい) ・ヨイヨイ	譜例3 繰り返された喃語的音声「テーテツ」 $\text{♩} = 144$ ひと呼吸  H児の音声表現： テー テツ … テー テツ … テー テツ … 譜例4 動作を伴った2拍の音声表現「バービツ」 $\text{♩} = 108$ ひと呼吸  H児の音声表現： バー ビツ バー ビツ H児の身体の動き： ↑ ↑ ↑ ↑ 前へ 後へ 前へ 後へ
13 か 月	・ウアァ ・ホラ ・ハイ ・アツチャ(お茶)	譜例5 動作を伴って繰り返された2拍の音声表現「チャーチャツ」 $\text{♩} = 100$ f ひと呼吸  H児の音声表現： チャー チャツ チャー チャ チャー チャツ チャー チャツ H児の動き： ↑ ↑ ページに ページを 手をかける めくる

14 か 月	・ニャーニャー(猫) ・ヤッター ・ンマイ(うまい) ・ワンワン ・アット(ありがとう) ・コエ(これ) ・オイデ	譜例6 H児の2拍の発話「バーイバイ」をもとに展開した母親と友人のやりとり ♩ = 92 ひと呼吸 H児の音声表現： バー バイ 母親の友人の音声表現： ばー い ばい ばー い ばい なー い ない 母親の音声表現： ばー い ばい なー い ない なー い ない 譜例7 H児の発話「バーイバイ」と母親のリズミカルなやりとり ♩ = 69 ♩ = 108 H児： ひと呼吸 バー イ バイ 母親： なー い ない しょう なー い ない なー い ない 譜例8 リズミカルにまとめられた音声表現「オーイデッ」 ♩ = 108 ひと呼吸 H児の音声表現： オー イ デ
15 か 月	・ナイナイ ・ネンネ ・カカー(おかあさん) ・アーア(失敗したとき) ・タンタン(お父さん) ・パンパンパン (アンパンマン) ・パンプキエー(乾杯)	譜例9 動作を伴った2拍の音声表現「アーアー」 ♩ = 72 ひと呼吸 H児の音声表現： アー アー アッ アー H児の動作： ↑ ↑ ↑ ↑ 積木を 止めた手を 積木を 止めた手を 落として 動かす 落として 動かす 手を止める 手を止める

16 か 月	・コーヤッテ ・コリヨコリヨ(コロコロ) ・ヨイショ ・アチー(熱い) ・ターター(痛い) ・バイチャー(ばいきんまん) ・コレ ・ドーゾ ・イヤー(嫌) ・チトー(ごちそうさま) ・チャーチャン(おかあさん)	譜例10 2拍にまとめられた1語「チャーチャン(おかあさん)」 ♩ = 116 ♩ = 56 ひと呼吸 ひと呼吸 H児の音声表現：  チャー チャン  チャー チャッ
	・オイチー(おいしい) ・アンパンマン ・マッテー(待ってー) ・イクデー(行くよ) ・ドータ(どうさん) ・チュチュ(靴下) ・ボー(ボール) ・ポンポン(お腹) 【二語発話出現】 ・アンパンマン、ガ ・バイキン、ダ (ばいきんまん、だ)	譜例11 2拍にまとめられたかけ声「チーチョ(よいしょ)」 ♩ = 100 ひと呼吸 H児の音声表現：  チー チョ  チー チョ  チー チョ 譜例12 動作と同期した発話「ドージョ(どうぞ)」 ♩ = 108 ♩ = 63 ひと呼吸 ひと呼吸 H児の音声表現：  ドー ジョ ...  ドー ジョ H児の動作：  紙を 差し出す  紙を 差し出す
17 か 月		譜例13 H児が創造した2拍の擬音語「ザックン」と母親の表現 ♩ = 72 ♩ = 80 ひと呼吸 ひと呼吸 H児の音声表現：  ザッ クン  ザッ クン H児の動作：  切れ目に 包丁を 入れる  切る 母親の音声：  ざっ くん 譜例14 2拍の擬音語「ザークン」と動作の関わり ♩ = 66 ひと呼吸 H児の音声表現：  ザーッ クン ...  ザーッ クン H児の動作：  力を入れて ひっぱる  両手が 離れる  力を入れて ひっぱる

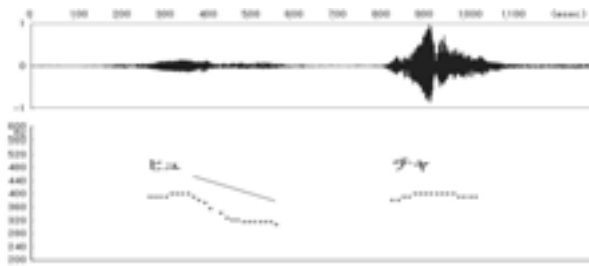


図1 H児の喃語的音声「ヒューチャッ」(生後11か月29日)の音響分析

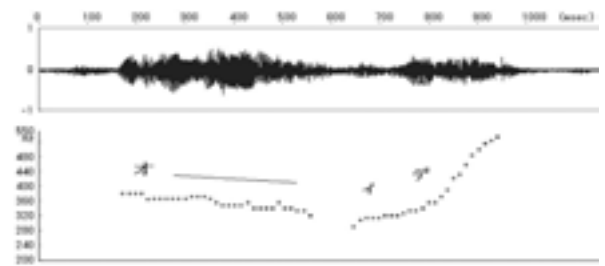


図6 H児の発話「オーイデ」(生後14か月31日)の音響分析

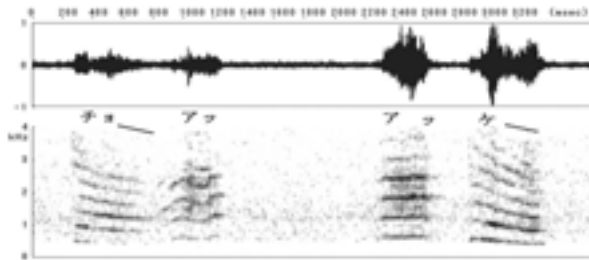


図2 H児の喃語的音声「チョーアッ…アッケー」(生後11か月29日)の音響分析

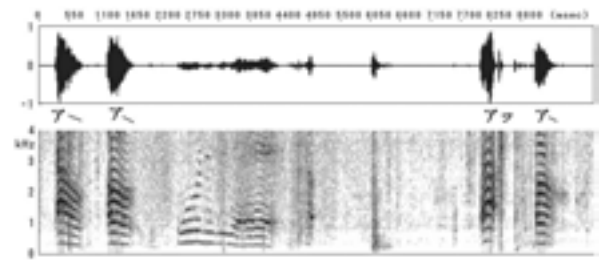


図7 H児の発話「アーアー」(生後15か月17日)の音響分析

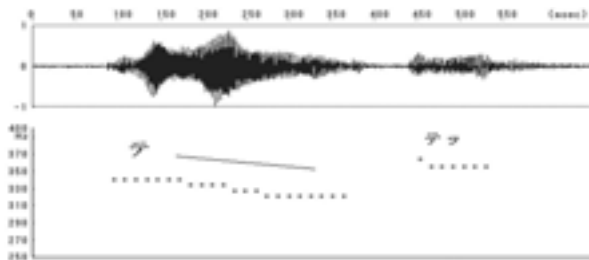


図3 2回目に発声された「テーテッ」(生後12か月25日)の音響分析

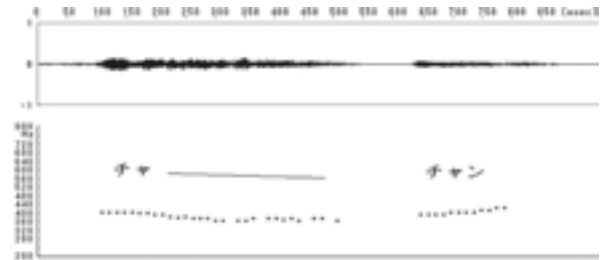


図8 H児の1回目の発話「チャーチャン」(生後16か月29日)の音響分析

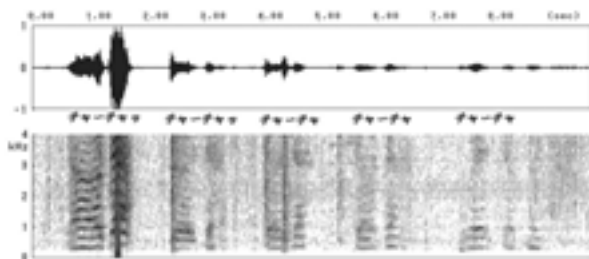


図4 H児の喃語的音声「チャーチャッ」(生後13か月7日)の音響分析

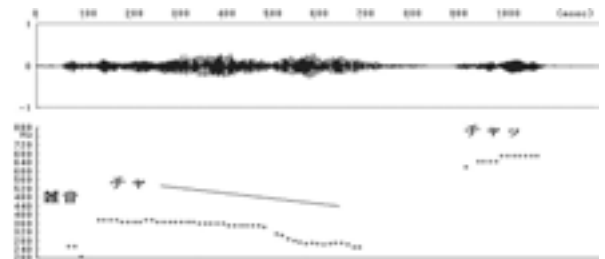


図9 H児の2回目の発話「チャーチャッ」(生後16か月29日)の音響分析

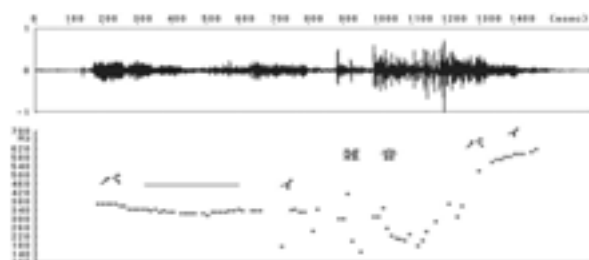


図5 H児の発話「パーイバイ」(生後14か月31日)の音響分析

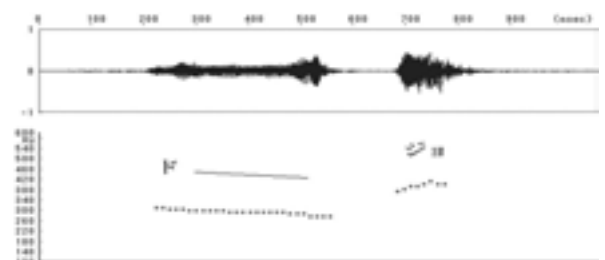


図10 H児2回目の発話「ドージョ」(生後17か月12日)の音響分析

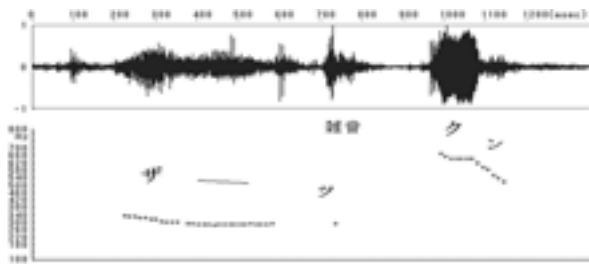


図11 2回目の「ザーッくん」(生後17か月22日)の音響分析



図15 母親と向き合い心を落ち着かせるH児(生後16か月)



図12 母親とともに絵本をみるH児(生後11か月)



図16 観察者にノートを差し出すH児(生後17か月)



図13 力強い発声とともに絵本をめくるH児(生後13か月)



図17 包丁を持ってH児にモデルを示す母親



図14 積み木を頭の上に乗せて観察者に視線を向けるH児(生後15か月)



図18 包丁を持って切ろうとするH児(生後17か月)

図版出典

図表、楽譜はすべて執筆者による撮影、作成。

注

- 1 村山貞夫編『日本の幼児の成長・発達に関する総合調査——保育カリキュラムのための基礎資料——』サンマーク出版、1987年。
- 2 岡林典子『乳幼児の音楽的成長の過程——話し言葉・運動動作の発達との関わりを中心に——』風間書房、2010年、109頁。
- 3 2010年8月12日、JR東海道線の電車の中で3歳児が数字の6をもとに唱えていた表現である。
- 4 窪菌晴夫「日本語の韻律構造とその獲得」『音声言語医学』38(3)、1997年、281-286頁。
- 5 香川彩・伊藤友彦「1～2歳児の呼称における短縮語の韻律的特徴」『東京学芸大学紀要1部門』55、2004年、155-160頁。
- 6 林安紀子「韻律知覚と言語習得」『ことばの獲得』桐谷滋(編)、ミネルヴァ書房、1999年、49-70頁。
- 7 麦谷綾子「乳幼児の音声言語獲得」『電子情報通信学会』、2004年、13-18頁。
- 8 小泉文夫『音楽の根源にあるもの』青土社、1976年、150-174頁。
- 9 本稿では、日本語の50音図に示されているような基本単位の言語音(直音、拗音、撥音、促音、長音——この基本単位の言語音は、「拍」「モーラ」などとも呼ばれている)を、「音(おん)」と呼び、1音という単位として数える。したがって、「あ」「ば」「きゃ」「ん」「っ」「ー」なども1音として数え、「パンダ」ならば3音、「スキップ」ならば4音とする。
- 10 坂野信彦『七五調の謎をとく』大修館書店、1996年。
- 11 岡林典子・坂井康子「母子コミュニケーション場面にみられる創造的なことばのやりとり——日本語のリズム感に注目して」『表現文化研究』第7巻第1号、2007年、11-26頁。
- 12 坂井康子・岡林典子・佐野仁美「日本語の韻律の獲得——母子間で交わされた3拍の唱えことばの抑揚」『表現文化研究』第8巻第2号、2008年、85-97頁。
- 13 ①「律文と散文」『日本語百科大事典 縮刷版』金田一春彦・林大・柴田武編、大修館書店、1988年、865-869頁、②坂野信彦『七五調の謎をとく——日本語リズム原論』大修館書店、1996年、52-67頁、③坂野信彦「日本語の音数率」飛田良文・佐藤武義編『現代日本語講座 第3巻 発音』、2002年、124-142頁、以上3冊の解釈による。
- 14 音声分析ソフトは「杉藤美代子『SUGI SpeechAnalyzer』2000 アニモ」を用いた。
- 15 前掲書、注11、12。
- 16 前掲書、注2。
- 17 作曲家の間宮芳生は「2字ずつかためて唱えるリズムの

とり方」を、さらに3種類に分類し、(1)等分の形、(2)前へよる形、(3)はずむ形、と呼んでいる。〔間宮芳生「日本民謡におけるリズム」『音楽芸術』7月号、1957年、15-26頁。内田るり子編『間宮芳生 日本民謡集』全音楽譜出版社、1975年、132-143頁。〕

- 18 前掲書、注2、140-142頁。
- 19 前掲書、注13②、17-31頁。
- 20 窪菌晴夫『日本語の音声』岩波書店、1999年、143-156頁。
- 21 前掲書、注2。
- 22 藤田芙美子「周囲の音や音楽に注目し、探索する——保育園0歳児クラスの音楽行動の観察から——」『日本保育学会第51回大会研究論文集』、1998年、320-321頁。
- 23 大伴潔「喃語から言語への移行における音声コミュニケーション発達の諸相」『特殊教育研究施設 研究年報』、1996年、9-16頁。
- 24 前掲書、注11、12。

■執筆者について

岡林典子(おかばやし・のりこ)

神戸大学大学院教育学研究科音楽教育専攻修了。神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程修了。博士(学術)。京都女子大学短期大学部准教授。研究分野は音楽教育学。

e-mail: okabays@kyoto-wu.ac.jp

坂井康子(さかい・やすこ)

神戸大学大学院教育学研究科音楽教育専攻修了。神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程修了。博士(学術)。甲南女子大学教授。研究分野は音楽教育学。

e-mail: sakay@konan-wu.ac.jp

■Notes on the Contributors

Noriko Okabayashi completed her MAs in Music Education at the Graduate Schools of Education of Kobe University. She advanced her studies at the Graduate School of Cultural Studies and Human Science, Kobe University where she gained a Ph.D. She is Associate Professor at Kyoto Women's University. Her research field is Music Education.

Yasuko Sakai completed her MAs in Music Education at the Graduate Schools of Education of Kobe University. She advanced her studies at the Graduate School of Cultural Studies and Human Science, Kobe University where she gained a Ph.D. She is Professor at Konan Women's University. Her research field is Music Education.